

# 「発達障害」って？

大人になってから発症することはありません。ただ、高機能（＝知能の遅滞がない）発達障害の場合、子どもころには障害が顕在化しなかったケースも多いのです。学校時代の勉強やスポーツは手順ややるべきことが明確で、いわゆる構造化がされており、発達障害があっても成績はとれます。

ところが、社会人になると、仕事の全体像をとらえ、優先順位をつけて自分で仕事を組み立てていかなければならないので、発達障害の人には難しくなってきます。こういったときに障害の面が露呈し、「発達障害が発症した」かのように見えてしまうことがあるのです。

## 過剰診断の問題

Q もう一つの誤解として、「コミュニケーションが苦手な人」のことをすぐに「発達障害ではないか？」と見なす風潮が、最近ありますね。それが、いま問題になっている「過剰診断」（＝発達障害ではないのに、発達障害と診断されてしまう）の背景にもなっているわけですが…

沢井 「コミュニケーションが苦手な人がみんな発達障害であるわけではありません。例えばASDでいいですよ、私どもの世界で俗に「三つ組み」と言いますが、「社会性の障害」と「コミュニケーションの障害」、そして「イマジネーションの障害」……その三つが揃っていないとASDではないのです。また、そうした傾向が幼少期から見られるという点も、診断には必要になります。ですので、幼少期からの生育歴の聞き取りは、確定診断に必須です。

Q 「イマジネーションの障害」とは、どついう意味でしょう？

沢井 私たちは、たとえば通勤するだけでもいろんな想像力——イマジネーションを働かせています。「電車が途中で

事故を起こして止まった場合はどうしよう？」とかいうことを、実はオートマチックに考えているのです。ところが、発達障害の人はそういった想定をせずに電車に乗っています。だから、通勤電車が事故で止まったとか、いつもに無いことが起きるとビックリして、どうしたらいいかわからなくなってしまうたりしてしまうのです。

Q そのような日常レベルの予測・見通しの能力が乏しいことが「イマジネーションの障害」なのですね。だからこそ、発達障害のもう一つの特徴である「同一性へのこだわり」が生まれる、と……

沢井 そうです。発達障害の人は「いつもと違う」と感じる不安になってしまいます。だからこそ、同一性に過剰にこだわる。たとえば、特定のモノに強く執着したり、特定の道順で行き帰りにすることに執着したりするのです。

## ASDという障害の本質

Q ASDという障害の本質的なところを先生はどう考えておられますか？

沢井 ASDの脳の特性の説明原理はいくつかありますが、私は「シングルトラック」、つまり「同時に並行して複数の情報処理をすることが苦手」という脳機能の特性が、この障害の本質だと考えています。私たちは会話をするだけでも、無意識のうちにくつかのことを同時並行でこなしています。相手の話の内容に注意を払い、声の調子にも注意を払い、表情の変化という視覚情報も処理し……という具合です。ところが、ASDの人はそういう同時並行作業が苦手です。言葉の意味に注意を向けられ、声や表情には注意が向かなくなってしまう。だからこそコミュニケーションが苦手で、「空気が読めない」と言われてしまったりするのです。

仕事においても、「ゆっくり、ていねいにやってください」と言われたら指示通りにできるけれど、「ていねいに、かつ急いでやってください」と言われると、途端に難しくなってしまうたりします。

Q なるほど。そういう特性があるからこそ、「仕事ができ」と評価されてしまったりするわけですね。

## 発達障害の告知と治療について

沢井 告知の話に移ります。人間の性格の場合、短所は裏返せば長所であったりしますね。気の弱さという短所が優しさという長所でもあったり……。発達障害における「同

発達障害とは「脳機能の特性」であって「脳機能の良い悪い」ではありません。

その特性について対処すればより能力を発揮することもあります。

